えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第119号
令和3年
(2021)
3－4

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸・東京 下町めぐり
日本橋大伝馬町・小伝馬町・本町……1～2
2021年度［古文書講座］の概要とご案内……3
えど友広小路……4～5
会員からの投稿「『侠客』を読んで」、「江戸時代お金の不思議」/ サークルだより / 翻刻だより / 友の会めも
第11回「えど友会員発表会」発表者募集……5
友の会セミナー「浮世絵で見る江戸時代」……6
えどはく探訪「寺子屋」……7
特別展「古代エジプト展　天地創造の神話」観覧記……8
えど東京一景(26) ―洗足池公園―……9
江戸博クリップ「デジタルアーカイブ」……9
江戸名所図会を歩く…㊸［東叡山寛永寺］(後)……10
催事案内／会員優待のお知らせ……11～12

江戸・東京 下町めぐり

日本橋大伝馬町・小伝馬町・本町

～歴史ある伝馬町界隈そぞろ歩き～

『えど友』の「江戸・東京 下町めぐり」は、これまでに日本橋小網町(88号)、日本橋蛎殻町(93号)、日本橋浜町(111号)を取り上げましたが、今回は日本橋大伝馬町・小伝馬町・本町の伝馬町(てんまちょう)界隈にスポットを当てます。ビルが林立するオフィス街に変貌した町の片隅に懐かしい江戸の風情を探します。

伝馬町

お江戸日本橋は徳川将軍のお膝元、五街道の起点であり、魚河岸などで賑わい、まさに日本の中心といわれています。しかし、江戸の初期、日本の中心地はそれよりもう少し北側、小伝馬町、大伝馬町など伝馬町地域こそが日本の中心だったと思われます。問屋町、職人町それぞれが軒を並べ、商人の町として繁栄を極めました。また、浮世絵師や戯作者、狂言師なども多くここに居をかまえ、写楽や十返舎一九などを輩出した町でもありました。この付近にヒト、モノ、コトが集中、ここはまさに経済、文化の情報発信基地だったのです。

▲初代歌川広重「東都大傳馬街繁榮之圖」(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)

伝馬町の由来

「伝馬」とは幕府公用の人や荷などの継ぎ送りに利用される馬のことで、「伝馬役」とは馬や人足を手配し、荷物を宿場から宿場へと運送するなどの実務一般を取り扱う機関です。

徳川家康が初めて江戸の地に入ったとき、駄馬、人夫を率いて真っ先に出迎えたのが同郷三河出身の馬込勘解由(まごめかげゆ)の一行でした。喜んだ家康から彼は「道中伝馬役」の職を命じられました。馬込家は現在の呉服橋付近にあった宝田村に屋敷を構え、村名主となって公務に当たります。その後、この地は江戸城の拡張工事のため、移転せざるを得なくなり、新たな拝領地となったのが現在の伝馬町地域です。

大伝馬町・三河商人

一行の中から商人の嗅覚に敏感な人たちが目をつけたのが伊勢、三河特産の木綿でした。木綿は染めやすく、加工しやすい、保温性にも優れ、値段も安いので衣服や布団に愛用されました。そして伊勢、尾張、三河から人々が続々集まってきて、商売を拡

大していき、伝馬町、なかでも大伝馬町は加速度的に成長を遂げていきました。

伊勢木綿は大流行、特に大伝馬町一丁目には、伊勢出身の木綿問屋が集まり、「一丁目(大伝馬町)は伊勢店ばかり」と揶揄されるほどでした。当時、江戸では、倹約令によって華美な着物を堂々と着られなくなっていたところに、遠目から見ると無地のように見え、近づいてみると様々な縞柄模様が粋でおしゃれだとして、江戸っ子をとりこにしたのです。

本居宣長

伊勢屋の暖簾が目立つ大伝馬町ですが、伊勢の商人は「小津」姓が多く、これは、伊勢松坂近郊の小津村から出てきた男が小津を屋号にして大成功をしたので、みな小津を名乗るようになったのです。あの国学者本居宣長も旧姓は小津で、伊勢松坂の木綿商人の息子でした。宣長は伊勢松坂の商人のシンボルのような小津姓を嫌い、先祖の姓本居を名乗り、やがて偉大な国学者になります。商売上手な伊勢商人ではなく、商売が苦手だったのが幸いしたようです。

旧十思小学校

小伝馬町の旧十思小学校は、明治10年(1877)創立の歴史ある小学校です。中国の歴史書『資治通鑑』にある「十思之疏」という天子の10の心得と、当時の学区制で第十四の音が通じているところから名付けられたそうです。平成２年に人形町の東華小学校と統合し、校名も「日本橋小学校」として現在に至っています。今では創立30年を超え、時の首相や文部大臣も訪れたこともあり、越境してでも入りたい憧れの都心の名門小学校になっています。

またアーチ型の窓と、玄関をはじめ丸みを帯びたデザインに親しみを感じる旧十思小学校は現在、保育園、老人介護施設などが入居する「十思スクエア」として再生活用されています。

伝馬町牢屋敷跡

現在の大安楽寺、身延別院、十思公園、旧十思小学校を含む一帯が伝馬町牢屋敷でした。広さは2618坪ありました。町奉行支配下の石出帯刀が典獄として世襲で務め、慶長18年(1613)から、明治８年まで263年間存続しました。その後、牢屋敷は取り壊され、跡地は久しく草っ原になっていました。人々はこの地を「牢屋の原」と呼び、忌み嫌っていましたが、この空き地に目をつけた興行師たちが、見世物小屋を掛け、露天商などが出て、見違えるように賑わいました。孤高の作家中勘助が『銀の匙』の中で、「幼少の頃、伯母によく牢屋の原へつれていかれた。いろんな見世物がしょっちゅうかかっていた」と書いています。

明治15年、獄死者を弔うために大安楽寺が建立されました。財界の大物、大倉喜八郎と安田善次郎らが寄進したので、「大」「安」楽寺としました。

▲大安楽寺

石町の時の鐘

江戸庶民の暮らしに欠かせなかった鐘、それが設置されたのは徳川２代将軍秀忠の時代です。最初のものが本石町にあった鐘で、「石町の時の鐘」と呼ばれました。多くの人に親しまれ、「石町は江戸を寝せたり起こしたり」と川柳に詠まれました。また、鐘つきの堂主が、今日は伝馬町で処刑が行われると聞くと、ことさらに暮れ六つの鐘を突く時間を遅らせたので、「情けの鐘」といわれていました。昭和５年(1930)に十思公園内に移設されました。

吉田松陰先生終焉の地

十思公園に「吉田松陰先生終焉の地」の石碑があります。吉田松陰は伝馬町の牢に２度入れられています。最初が黒船で密航しようとして捕まり、５カ月間投獄されます。２度目は安政の大獄に連座して再び投獄、死罪を言い渡され即日斬首されました。29歳２カ月のあまりに短か過ぎる生涯でした。松陰という人物は、純粋無垢、限りなく明るい心を持った若者で、呆れるばかりの生真面目さと、前へ、前へとひたすら突き進む積極果敢な行動力がありました。それが時代を超えて多くの人々に深い感動と共感を与えているのです。

▲「吉田松陰先生終焉の地」石碑

宝田恵比寿神社

もと宝田村の鎮守で、村人とともに移転してこの地にやってきたのが宝田恵比寿神社(本町３丁目)です。商業の守護神としてずっと江戸商人のあつい信仰を得てきました。大根を麹と砂糖でつけた漬物を売る「べったら市」は、江戸中期ごろから始まったといわれ、毎年10月19日と20日、小伝馬町、本町周辺で行われています。数多くの露店、屋台が並ぶこのお祭りは、今も日本橋のオフィス街で働く人たちにとって一種のオアシスとなっています。去年は残念ながら新型コロナウイルスの影響で中止となってしまいました。当日訪れてみましたが、小さな境内はひっそりとして心なしか寂しげにみえました。またいつか、あの賑わいが戻ってきてほしいと願いながら神社を後にしました。

参考資料：水原明人『大江戸「伝馬町」ヒストリー』『東京史跡ガイド②中央区史跡散歩』『中央区三十年史』中央区編

【取材】文・写真：広報部会・岡本　脩

2021年度［古文書講座］の概要とご案内

**ご好評をいただいている古文書講座の2021年度の内容を
３人の講師にご紹介いただきました。**

◆**入門編**（担当：田中潤講師）
《学習院大学非常勤講師／現在力を入れている研究テーマ：日本文化史・有職故実（服飾・染織など）》

○受講対象者・レベル：活字による文書から、電子情報による文書の時代へと急速に変化が進む現代において、手書きの文字の持つ大切さが一層際立つように感じられます。一つの文字を、どのように崩して書き、文面全体の中ではどのように文字同士の調和を取るか。活字の世界では縁遠くなった感覚を、崩し字で書かれた古文書は私たちに思い出させてくれます。

この講座では、初めて崩し字（古文書）に触れられる方、すでに読める方であっても、基礎から確認をなさりたい方なども歓迎し、全くの初心者の方に合わせた進度で講座を進行します。その際、古文書を読んでいく上での三つのポイント、「①文字から読む②文脈から読む③周辺の知識から読む」に焦点を当てながら、古文書に書かれた文字の『くずし字辞典』での調べ方、基本的な文字の読み方など、古文書を読んでいくために最低限必要となる基礎的な知識について、テキストに沿いながらご紹介していきます。そして、ご自身が読んでみたいと思う古文書や、博物館・美術館に展示された古文書などに、より親しみをもって見ていただく上でポイントとなる、書かれた文字だけにとどまらない古文書の背景にある様々な情報についても紹介していきます。

○講座の進め方：崩し字が読めても、内容が正しく理解できるように読めないと、古文書が読めるようになったとはいえません。この講座ではまず活字に直したテキストで、古文書の読みを確認し、その上でテキストとなる崩し字の解説を行います。テキストは基本的に初回に１期分（計３回分）を一括して配布し、受講者の方々が受講以前に目を通していただいた上でゆっくりと進めていきたいと思います。

○使用史料：江戸時代の人々が初等教育用の教科書として使った、往来物と呼ばれる往復書簡の形式をとったものを中心とし、今年度も前年度に引き続き、関東地方の地誌に関する往来物を取り上げ、合せて適宜関連する史料や仮名で書かれた和歌なども取り上げます。

◆**初級編**（担当：安藤奈々講師）
《学習院大学大学院史学専攻／現在力を入れているテーマ：近世対外関係、琉球の社会史。身分制度や、琉球使節の構成》

○受講対象者・レベル：本講座では基本的な崩し字が読める方を対象にしていますが、入門と中級の架け橋となるよう心掛けており、文字の解説にも力を入れています。

○講座の進め方：初回に１期分のテキスト（３回分）を配布し、まず各回で講義前半は、扱う史料の内容・背景知識を解説します。後半に、史料読解に入っていきます。よく出てくる文字の崩れ方、似ている文字や、また難読文字の解説などを重点的に行います。レジュメは読み下し、現代語訳、釈文もつけて復習できるように心掛けて作っています。２回目以降は予習をした上で受講をしていただきたいと思います。

○使用史料：基本的には江戸に関する史料を読みますが、毎回一つテーマを決め、そのテーマに沿っていろいろな地域とを比較するなど幅広く史料を読んでいこうと思っています。

◆**中級編**（担当：吉成香澄講師）
《徳川林政史研究所非常勤研究員／現在力を入れて取り組んでいる課題：将軍姫君の婚姻と幕藩関係・江戸城大奥》

○受講対象者・レベル：本講座では、基本的な崩し字が読める方を対象にしています。

○講座の進め方：初回に全回分のテキストを配布し、各回で参考となるレジュメを配布します。本講座では、古文書を解読するにあたり押さえておきたい字を解説の対象とします。テキストは変体仮名などが入ることがあります。史料に記された内容の解釈や解説、関連する研究成果の紹介などを重点的に取り組みます。講座を通じて江戸幕府や武家社会についての知識を広め、史料への理解を深めていくことを目指します。

○使用史料：「多聞櫓文書」（国立公文書館所蔵）などの幕府史料、大名家の史料など。

○史料の内容：幕府の諸役所で作成された将軍・大奥・幕府役職の記録類。武家関係など。

新年度第１期５月開講のお知らせと留意事項

古文書講座の新年度第１期は５月から下記日程で開講予定です。申込は講座ごとで、**申込の受付は３月末まで**です。多数の皆さんのご参加をお待ちしています。

◆**入門編**
・講師：田中潤さん
・開催日：5/12（水）、6/2（水）、7/21（水）

◆**初級編**
・講師：安藤奈々さん
・開催日：5/19（水）、6/16（水）、7/28（水）

◆**中級編**
・講師：吉成香澄さん
・開催日：5/22（土）、6/19（土）、7/3（土）

- 時間：午前は10時30分～12時30分
  午後は14時～16時
  （午前か午後かを忘れずに明記）
- 定員：各講座とも80人（会員のみ）
- 参加費：各講座とも全3回2,000円（初回一括払い）
- 会場：各講座とも江戸東京博物館１階会議室
  （ただし5/22の中級のみ学習室）

【企画担当責任者】
川上由美子（事業部会）

会員からの投稿

『侠客』を読んで

林　正信

幡随院長兵衛といえば「お若ぇの、お待ちなせえやし」という、あの有名な台詞を思い出します。池波正太郎の『侠客』はこの幡随院長兵衛の若き日から、劇的な最後までを描いたものです。３代将軍家光没後の慶安の頃で、江戸には「旗本奴」、「町奴」が台頭していました。長兵衛が20歳のとき、父親が見も知らぬ浪人衆に斬られて亡くなり、その場に居合わせた長兵衛も重傷を負います。しかし、たまたま通りかかった水野百助(後の水野十郎左衛門成之)に助けられ、これが２人の運命の出会いとなりました。このときから、29歳の百助の協力を得ながら、長兵衛は仕事の斡旋などをする「人入れ宿」(私設の職業紹介業)の主人山脇宗右衛門の元に身を寄せ、仇討ちの機会をうかがい、無事仇討ちを果たしました。

その頃の江戸の町は急激な発展期で、諸国からさまざまな人間が江戸へ流れ込んでいました。労働者や江戸庶民の世話をつとめた集団が「町奴」と呼ばれ、この町奴の頭領に長兵衛がなります。長兵衛はその後の自分の人生をひたすら世のため、人のために尽くそうと決心、やがて、望まれて「人入れ宿」の山脇宗右衛門の跡を継ぎました。

一方「旗本奴」の中でも一番悪名の高いのが「白柄組」であり、その頭領は水野十郎左衛門でした。幕府は威張り散らし、喧嘩騒ぎが多い旗本奴を抑えようとしますが、官僚にはなりきらず、いつまでも時代遅れの軍人集団のままの連中に手を焼く始末でした。そのような中、意地の張り合いが生じ、旗本奴と町奴の二つの集団が衝突をくり返します。水野は長兵衛という人物を知っているからこそ殺すには忍びなく、できるなら喧嘩もしたくないと悩みます。やがて、水野は一献を酌み交わしながら、仲直りをしようと、水野屋敷に長兵衛を招待します。しかし、幕府に追い詰められ自暴自棄になった旗本奴の手によって長兵衛は襲撃されました。鉄砲の音を聞き、水野が長兵衛の元へ駆け付けますが、長兵衛はこれは水野の指示ではないことを知らされながら絶命します。享年36歳でした。

その後、時代の流れにより、幕府によって「旗本奴」は徹底的に弾圧されます。水野も６年後に53歳で亡くなりました。

平成26年、事業部会に入会した頃は池波正太郎をはじめ、時代小説を読み始めた時期で、この『侠客』は大変感動しました。枯葉の舞う頃、台東区東上野の「源空寺」にお墓があることを突き止め、お参りに行きました。長兵衛夫婦が仲良く並んだ地蔵尊の墓石が安置されています。お参りが済み、帰ろうとした時、墓地の北側から急に冷たい風が吹き、墓地内の卒塔婆が、バタバタ……と音を出しながら「ドミノ倒し」みたいに動き出しました。長兵衛さんに、お願いごとが伝わったのかな？　と思いつつ、墓地を後にしました。

江戸時代お金の不思議

元沢　宏

時代劇「鬼平犯科帳」のテレビで、盗人が千両箱を担いでスタスタと逃走するさまを目にします。重たくなかったのだろうか？

江戸博の千両箱は直方体で、時代劇の千両箱はそれよりも細くなっています。少しテレビと違う。約14kg!!　重いですよね。江戸時代の年代によって、貨幣の鋳造により、20kg以上だったというお話も。盗人は本当に１人で１箱担げたのか？　重い！　江戸博の模擬の千両箱の形状は、時代劇で見るもの(江戸博のように長くない)とちょっと違って、横に細長い直方体ですが、これが本当だったのでしょうか？　現存する千両箱の資料写真でも見かけたりします。やはりその重さでは、日本橋辺りで盗んだ大量の千両箱を運搬するには、川沿いに船で遡り、川越辺りまで逃げるシーンがあったのには納得です。きっと、そこでいくつもの千両箱を、盗賊一味は分配なのかな？

千両箱には、きっちり千両が入っていたわけではないと思います。「鬼平犯科帳」で、蔵に忍び込んだ盗人がずらりと置いてある千両箱を、スイカの実り具合を試すように、コンコンと叩いてみてそんなに金子で詰まっていない箱を物色し、欲をかかないで盗み去るシーンもあります。悪いことをしているのに、「なんかいいなあ」と思っている自分がいます。変ですね…。欲をかき過ぎると、かなり重い災いになりそうですね。

テレビの時代劇を見ていて「千両って、いくらになるんだろう」という話になります。もちろん現代も物価指数というのがあるから、何を基準とするかで、大きな違いがあるし、また、江戸時代の初めから幕末までかなり変動があったのだろうと思いますが。小判の金の含有量も、江戸時代の中でも何回も鋳造されているようだしと、いろいろなところで発信している資料をなぞるのみです。

時代劇「剣客商売」では、秋山大治郎の貯えがなく、お金を工面するのに、佐々木三冬から秋山大治郎が３両を借用するシーンがあります。３両は、いくらだろう？　田沼意次がいた時代です。お米の相場から勘案すると、大雑把に22万円ぐらいだそうです。前述の３両についてですが、秋山大治郎の父親、秋山小兵衛が大人の知恵として、人を使うことを大治郎に教えます。自分のできないこと(岡っ引きや下っ引きに情報収集を行ってもらうこと)に、手間賃として金子(心付け)を用立て、探索のお願いをする知恵を息子に教える様子は、昭和の時代でしたら通じることと思います。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

12月、1月休会。

◆藩史研究会

12月11日(金)杉山正昭さんの発表。相馬中村藩は、陸奥国(磐城国)宇多郡中村に藩庁を置いた外様の藩。天正18年(1590)、相馬義胤(よしたね)は秀吉から4万8千石あまりの知行を安堵されるが、慶長7年(1602)、関ヶ原の戦い不参のため改易。子の利胤は同8年、牛越城から小高城に移り、同16年、小高城から中村城に移る。幕末期は13代誠胤(ともたね)。明治元年(1868)5月、戊辰戦争では会津討伐を受け入れるが、その後奥羽越列藩同盟に加盟。しかし、8月征討軍に帰順。同4年、廃藩置県で中村県となる。参加者12人。

1月15日(金)「皆で調べる藩史」。小張藩は常陸国(茨城県)にあり、松下重綱が慶長8年～元和9年(1603～23)2万石にて治政後、下野烏山藩へ移封。天領となり、関東代官伊那忠治が利根川の流路を変え新田開発した。56年後の延宝7年(1679)、石川乗政(大給松平家)が旗本から入封、1.5万石にて治政。だが天和2年(1682)、信濃小諸藩に移封したため小張にわずか4年間存続した小藩。常陸国筑波郡小張に陣屋を構え、廃藩後再び天領になる。参加者8人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

12月、1月休会。

◆『江戸名所図会』輪読会

12月、1月休会。

お詫びと訂正

118号のサークルだよりの中で間違いがありました。深川三十三間堂の記載の中に「名残は江東区立矢数小学校の校名のみ。」とありましたが、正しくは「数矢小学校」です。

◆日本の大道芸伝承会

12月9日(水)定例発声練習で、外郎売りと、がまの油売りをやる。その後、物売り口上をやり、各自の得意演目を磨くべく個別練習。深川江戸資料館でのイベント出演が決まると練習にも熱が入った。参加者3人。

1月20日(水)絵解、地獄極楽や、がまの油売りなど、それぞれがやりたい演目をするつもりであったが、会場の時間短縮の影響でできなかった。深川江戸資料館優先の練習になった。参加者3人。

◆江戸を語る会

12月休会。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

12月、1月休会。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。

館蔵古文書翻刻だより

◆A班『新古改撰誌記』

文化四年八月晦日、若年寄堀田摂津守が拝領屋敷相対替許可の達しを目付森川金右衛門立合の上、担当目付内藤隼人正に仰せ渡した。その内容は、西丸裏門番与力高倉庄兵衛は小林吉十郎の屋敷・白山御殿跡百拾六坪余へ、目付支配無役小林吉十郎は石川利兵衛の屋敷・巣鴨火之番町百坪余へ、西丸切手門番同心石川利兵衛は高倉庄兵衛の屋敷・巣鴨火之番町弐百弐拾五坪へという複雑な形であったが、右願の通り屋敷相対替を仰せつけられた。ついては拝領屋敷担当の普請奉行へその旨説明しておくように……と。

ただし相対替の理由等の記載はないので、何のために相対替を実施したかは不明であるが、こんなことも行われていた次第である。『新古改撰誌記』には、しばしば拝領屋敷相対替について記載されている。拝領屋敷相対替とは、旗本が幕府から拝領した屋敷地を、その許可を得て、互いに交換すること。この交換は拝領の時から3年経過していることが必要で、かつ、敷地は分割できなかった。

友の会めも(開催日と人数)

令和2年12月～3年1月

◆役員会12月8日(火)13人。1月12日(火)中止・メール審議。◆事業部会12月1日(火)15人。1月5日(火)15人。◆広報部会12月15日(火)9人。1月19日(火)中止・メール審議。◆総務部会12月18日(金)9人。1月26日(火)休会。◆古文書講座 入門編、初級編、中級編とも1月、2月は中止。第3期は3月、4月の2回のみの講座に変更。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト 12月在宅作業でメール連絡。A班8人。B班6人。1月在宅作業でメール連絡。A班7人。B班6人。

第11回「えど友会員発表会」の発表者を募集します

◆この会は、日頃の友の会活動の中で培われた様々な成果の発表を通じて、会員の相互理解と交流を深めていただくことを目的としています。

◆「テーマ」は皆様の日頃の研究成果をはじめとして、豊かな経験に基づく昔語り、サークルで学んだ技等々「江戸東京の歴史と文化に関するもの」であればジャンルを問いません。

◆昨年はコロナの影響にて開催に至りませんでしたが、今年の再開を期し企画を進めてまいります。

◆「あなたが主役」の会員発表会です。多数の応募をお待ちしています。

【発表会概要】

・開催日時：9月2日(木)　13時30分～16時30分

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

【応募要項】

・発表者は友の会会員に限るものとし、講演料などのお支払いは致しません。

・発表希望者は、はがきまたは電話で、「発表会応募：氏名、会員番号、電話番号、発表内容」を事務局までお送りください。折り返し「えど友会員発表会申込書」をお送りします。必要事項をご記入の上ご返送ください。申込書の提出をもって正式の応募と致します。

・発表者は2人(組)、発表時間は1人(組)1時間以内を予定しています。

・応募締め切りは、5月6日(木)です。なお、応募者多数の場合は調整させていただきますが、その結果につきましては5月下旬に応募者にご連絡致します。

【企画担当責任者】大塚　仁(事業部会)

第198回　江戸東京博物館友の会セミナー（令和2年12月19日）

浮世絵で見る江戸時代

講師　堀口　茉純さん（歴史タレント／作家）

浮世絵とは

浮世絵版画は江戸時代に江戸で生まれました。江戸がどんな場所なのか文字の読めない人でも分かるのが浮世絵です。１枚がそば１杯くらいの値段だったため、手軽な江戸みやげとして人気がありました。広重の「東海道五十三次之内　日本橋」や英泉の江戸八景「日本橋の晴嵐」には働く庶民の姿が生き生きと描かれています。行商の棒手振り（魚商）、ちょうど青葉の頃なので初カツオ売りや、京橋にあった大根河岸から来た亀戸大根などの菜蔬売り（野菜の行商）も見えます。浮世絵を見るポイントの一つとして、富士山が描かれていれば日本橋から見て西方向の絵と分かります。

なぜ江戸で浮世絵が発達したのか

室町時代までの世では「憂き世」といって無常観、厭世観に基づき現世を否定的にとらえた、生きることはつらいことだという考えでした。江戸時代になると、どうせはかない世の中なんだから浮かれて世を過ごそうと、天下泰平の中で生まれた現世を肯定的にとらえた「浮世」という文字に置き換わりました。浮世絵は当時の人からみたら、うきうきワクワクさせるものでした。元祖浮世絵師といえるのは見返り美人で有名な菱川師宣です。吉原風景や遊女を描いています。なぜ見返りのポーズを取っているのか、それはヘアスタイルやファッションが良く見えるためのようです。現代のファッション雑誌のグラビアのような役割をしていたようです。このモデルは遊女ではないかという説もあります。

役者絵

美人画に次いで人気のあったのが役者絵です。歌川豊国の、中村座の内部の様子を描いた「中村座内外の図」という浮世絵があります。細かく見ていくと、客席で自由に好き勝手に振る舞う客の様子が分かります。半裸の人、飲み食いしている人、火鉢から火を出してしまった人など、当時はざわざわした自由な雰囲気のなかで上演されていたようです。もう一つ、死絵というものがあります。スターの死を知らせる号外のようなものでした。江戸の大スター八代目市川團十郎の死絵は格段に多く、300種以上あったといわれています。巡業先の大坂で32歳で突然亡くなり、自殺だったようです。イケメンではなかったようですが、声が良かったのと親孝行だったので人気でした。八代目團十郎は江戸時代で一番モテた人ではないでしょうか。モテ男伝説の一つに、助六の舞台で團十郎が入った天水桶の水が美白化粧水として、現在の価格にして1万円ほどで売れたという話があります。

相撲力士絵

江戸時代、町中での辻相撲は禁止されていたので、寺社の境内で勧進相撲が行われていました。当時は春、秋の２場所制でそれぞれ10日間の興行でした。「一年を二十日で暮らすいい男」といわれていました。「勧進大相撲興行之図」で土俵の四本柱に差してある小刀は、行司が軍配を差し違えたときに切腹するためのものです。雨が降ると取り組みはお休みなので、「勧進大相撲八景酒盛ノ図」では、力士たちが料亭で飲食をしながら子供相撲を見ている様子が描かれています。

食べ物を書いた浮世絵

広重の『名所江戸百景』の中に「びくにはし雪中」という絵があります。この絵の中には三つの飲食店が描かれています。一つ目は「山くじら」野獣肉店の看板です。江戸後期の人は肉も食べていたようです。薩摩の豚、近江の牛なども有名で、新選組では豚を飼っていて食用にもしたそうです。水戸の斉昭やその子の15代将軍慶喜も豚が大好きで慶喜には豚一というあだ名もありました。二つ目は「○やき十三里」という看板で、これは焼き芋のことで番小屋で売っていました。９＋４＝13里で、九里（栗）四里（より）うまい丸焼き芋ということです。三つ目は振り分け屋台のおでん屋です。比丘尼橋は現在の数寄屋橋近辺で南町奉行所のそば、京橋川に架かっていました。比丘尼の格好をした遊女のいた私娼街があったようです。歌川広景の「青物魚軍勢大合戦之図」という浮世絵は、安政６年（1859）に出版されたものです。同５年に江戸でコレラが流行し、三日コロリといって恐れられ、魚を食べた人にかかる人が多いのではといわれました。この絵は食べていいものの野菜軍と食べてはいけないものの魚軍との合戦の様子で、当然野菜軍が優勢です。しかし、この絵は当時の人が見れば、南紀派と一橋派の争いを擬人化して風刺しているのは明瞭です。野菜軍のとうがん次郎は井伊直弼、みかんは家茂、魚軍のたこは水戸斉昭、慶喜は鯱に描かれています。浮世絵は当時の時代を映す鏡であるといえます。

レポーターからひとこと

今まで浮世絵をただ漠然と眺めていましたが、細部を拡大して目をこらすと思いもかけない発見があるのを知りました。これから浮世絵を見る目が変わってきそうです。堀口さんのYouTube「ほーりーとお江戸、いいね！」やTOKYO MX毎週土曜の「お江戸に恋して」なども見るのが楽しみです。　　参加者119人。

【記録】文・写真：広報部会・福田　徹

寺子屋

江戸ゾーンの「町の暮らし」コーナーに復元した棟割長屋があります。家庭での出産、指物職人の仕事風景、寺子屋、大工の家庭、洗い張りで生計を立てる未亡人を設定して、その生活の様子を再現しています。江戸の人々の暮らしの一端を垣間見ることができます。その中の「寺子屋師匠」の展示を中心に、「寺子屋」について紹介します。

「寺子屋師匠」の展示

寺子屋は、江戸時代に普及した、文字の読み・書き、場合によってはそろばんを教える庶民の教育機関でした。寺子屋という呼び名は関西に多く、江戸では「手習い師匠」といったようです。明治16年(1883)文部省調査の『日本教育史資料』では、寺子屋は全国で1万6560軒が記録されています。ただし、調査もれが多数確認されているので、実際にはその数倍の寺子屋があったといわれています。

▲寺子屋の様子①

寺子屋の様子を見ると、部屋の奥で師匠が端座しています。机の上にある細い棒は、素読(読み方)の指導をするときに使う字突棒のようです。師匠の横に学問の神様である天神様の掛け軸が見えます。手習いのための天神机と文箱が出されています。この二つは、入学の時に持参したもので、子どもたちが始業前に並べ、終了後、部屋の隅に片づけます。生徒(寺子、筆子などと呼ばれていました)が4人。年上の子が別の子に読み方を教えています。師匠が書いたお手本で手習い中の子もいます。もう1人は頬杖をついて休憩しています。ばらばらに手習いが進められていることが分かります。寺子屋は、個別

▲寺子屋の様子②

授業が基本になっています。手習いの草紙(練習帳)は、真っ黒になるまで使います。初めは薄墨で、段々と濃くしながら手習いをします。後ろには、天神机と文箱が積まれています。欠席した子どものものです。また、壁に生徒の名札が並べられているのが見えます。

寺子屋の入学金・授業料

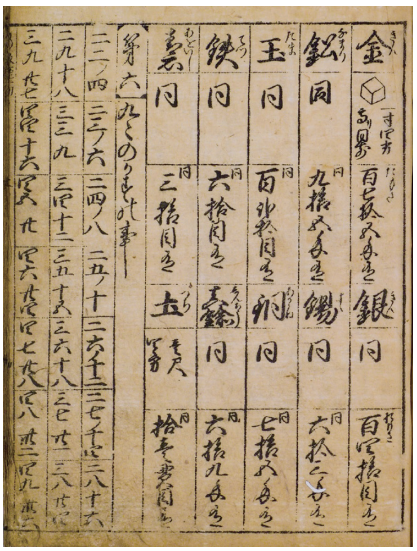
寺子屋への入学は、江戸では2月最初の午の日が一般的です。川柳に「初午の 日から夫婦は ちっと息」、「七つから 寺子屋に もりしてもらふ」というのがあります。昔も今も親の気持ちは同じようです。

入学金(入門料)は束脩と呼ばれていました。『江戸東京学事始め』によると入門料は金1分(1両の4分の1)から200～300文とまちまちで、収入が少ない家の子は少ない金額で寺子屋に入れたようです。授業料は謝儀と呼ばれ、盆暮や五節句に100文から1000文程度を持参しました。月謝に換算すると20文～200文程度です。その他、食品や物品なども届けられていたようです。

往来物

寺子屋の手習いは、いろは、数字などから始め、十干、十二支、方角、町名、村名・名頭(名前の頭の字を列記したもの)、国尽(日本の諸国の名を列挙したもの)などを学びます。師匠が書いて与えた手本を見ながら書き習い、初歩の手習いが終わると、往来物を学びました。往来物とは、平安時代末期から明治前期まで、広く使われた初級教科書のことをいいます。往復の手紙文を例文としたことから往来の名称が付けられました。江戸時代には、手紙文以外の初級教科書一般も往来物というようになりました。往来物の一種である『庭訓往来』は、室町時代に成立し、貴族や武士、僧侶の子弟の教育に使用されていましたが、江戸時代になると庶民のための教科書として最も普及したといわれています。漢字の学習用として人気があった『小野篁歌字尽』は、部首が同じ漢字をまとめ、漢字、その読み、まとめて覚える歌が書かれています。例えば、「椿榎楸柊桐」の漢字がふりがな付きで並べられ、それらをまとめて覚える歌(はるつばき なつはゑのきに あきひさぎ ふゆはひらぎに おなじくはきり)が添えてあります。

算術の入門書の『塵劫記』には、九九の掛け算や米や材木の売り買



▲『塵劫記』九九の部分
国立教育政策研究所教育図書館所蔵

い、金銀の両替の方法、ねずみ算などの計算方法が図とともに記載されています。九九の項目を見ると、「二九十八」の次は「三三九」となっています。これは一の位は飛ばし、「三二六」は「二三六」と同じなので飛ばして覚えるようです。川柳に「さはがしい　八つ上りまへ　九九のこゑ」という句があります。寺子屋が終わる八つ(午後2時ごろ)前に皆で声を合わせて九九を読んでいる情景が浮かびます。

参考資料：『図説江戸の学び』河出書房新社

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

特別展「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵 古代エジプト展 天地創造の神話」観覧記

▲パレメチュシグのミイラ・マスク

プロローグ「すべては海から始まった」

この展覧会には、日本初公開の約80点を含む「古代エジプト」に関する約130点が展示されています。まず、入口の床面の「ウジャトの眼」の影絵、黄金色のミイラ・マスクの巨大ポスター、そして真正面の黒っぽい「腹ばいになる山犬の姿をしたアヌビス神像」に迎えられます。すべてのものは混沌(カオス)とした原初の海「ヌン」から生まれた、とする古代エジプト神話は日本の神話に似通っていると思いました。

第1章「天地創造と神々の世界」

「天地創造の三大神話」と「オシリス神話」の説明書きに続いて、日本初公開の８点が並びますが、なかでも10cm足らずの「ホルス神に授乳するイシス女神の小像」、「有翼のイシス女神に保護された、ミイラ姿のオシリス神の小像」のイシスは聖母マリアのようでした。次の展示室は星々に照らされた石像群で、中心の「ナイルの神の像」を「セクメト女神座像」などの多様な神々が取り囲んで壮観です。次室への途中には癒しの女神として人気があったというネコの姿の「バステト女神座像」や、マングース像、ヒヒの護符、ハヤブサ頭のワニ像、牡羊頭の神像など動物の像が並んでいます。

▲ホルス神に授乳するイシス女神

▲バステト女神座像

第2章「ファラオと宇宙の秩序」

ファラオは神が造った宇宙の秩序「マアト」を遵守、遂行する人間界の最高責任者でした。神殿内を模し照明を兼ねた列柱をバックに「ハトシェプスト女王のスフィンクス像」、「トゥトアンクアメン(ツタンカーメン)にお辞儀をする廷臣たちのレリーフ」、青銅製の小像、供物盤などが展示されています。庶民が信仰した代表的なベス神の小像もありました。現在の１日24時間制は古代エジプトに起源をもつそうですが、「太陽賛歌が記されたネフェルヘテプのレリーフ」や「太陽の船に乗るスカラベを描いたパナヘシのペクトラル(胸飾り)」などに太陽信仰がうかがえました。ツタンカーメンの父・アクエンアテン王、その妃ネフェルティティのレリーフや彫像も目を引きます。

▲ハトシェプスト女王のスフィンクス像

▲太陽の船に乗るスカラベ

第3章「死後の審判」

心臓を天秤ばかりにかけて死後の審判をする内容の、約３分の動画を見て次室へ進みます。パピルス巻物の縦23.5cm横124cmの『アムドゥアト書』には夜、太陽神ラーの船が冥界を旅する様子、縦36.3cm横413.4cmの『死者の書』は、死後に必要な知識が、呪文と挿絵で描かれていました。どちらも彩色が施されています。そしてポスターにも使われている「デモティックの銘文のあるパレメチュシグのミイラ・マスク」には胸や背面に神話の世界が描写されています。近くには人型棺・内棺、外棺、棺蓋が横たえられたり立てられたりして圧巻です。ミイラと共に出土した石製や青銅製に交じって、青や淡緑の色が鮮やかな護符やネックレスなどの副葬品の数々に見入ってしまいました。また、礼拝場所であった石灰岩の「偽扉」や、砂漠の動物たち、沼地での漁、パピルスの茂みを船で行く場面などを描いた数枚のレリーフがありました。

▲カルトナージュ棺

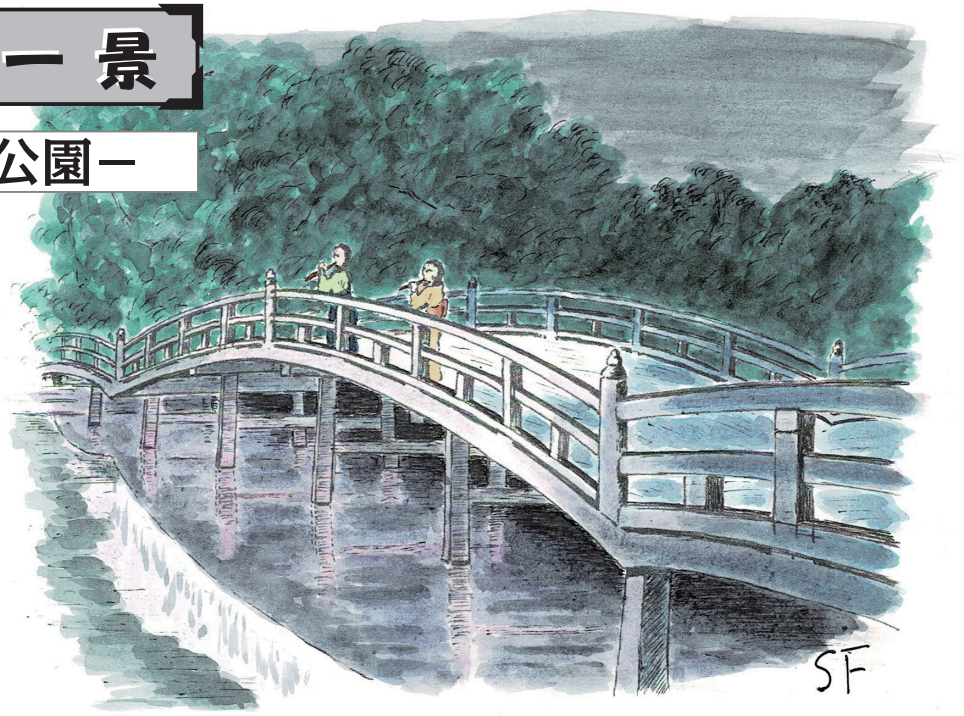
エピローグ「オシリスの予言」

冠に聖蛇を頂く「アテフ冠を被ったオシリス神の小像」を鑑賞したあと、約２分の動画上映です。この世界に終末が訪れ、原初の海「ヌン」にすべてが消えても、創造神アトゥムと復活の神で冥界の支配者オシリスの２神は生き残っており、再生できるというものです。最後の展示物は、創造神のさまざまな側面を表しているという、体は３匹で頭は一つの「３匹の魚とロータス(睡蓮)を描いた浅鉢」でした。この展覧会にベルリン以外では非公開の名品が多く貸し出されており、「奇跡の来日」といわれています。その貴重な遺物だけでなく、工夫された会場内のレイアウトにも驚嘆しました。４月４日まで開催のあと、京都、静岡、八王子の３会場を今年中に巡回予定です。

【取材】文･写真：広報部会･内匠屋京子

えど東京一景

(26) ―洗足池公園―



東急池上線の洗足池駅で下車、目の前の中原街道を渡ると、面積約４万m²の洗足池が広がっています。武蔵野台地の湧き水をせき止めた池で、昔は洗足郷の大池と呼ばれ、地元の潅漑用水として利用されていました。日蓮聖人が足を洗ったのが名の由来とされ、江戸時代から景勝地として知られていました。現在でも多くの人が訪れ、特に桜の季節には花見客で賑わいます。

公園入り口から池の畔を左回りに歩いて三連太鼓橋「池月橋」を渡ると、源頼朝の愛馬「池月」の像が迫力ある姿で立っています。池月は後に佐々木高綱に下され、宇治川の合戦の一番乗りを果たしています。すぐそばの千束八幡神社は頼朝が宿営して「旗揚げ八幡」と呼ばれるようになりました。池の最も奥まったところには、洗足池弁財天の赤い社が立つ弁天島があります。

さらに進むと、岸から少し離れた場所に勝海舟夫妻の墓や西郷隆盛の漢詩碑・留魂祠などがあります。この地を愛した海舟が別荘「洗足軒」を建て、遺言でここに葬られました。また、漢詩碑と留魂祠は海舟が四ツ木薬妙寺に建立したものですが、同じく遺言で没後に墓の隣へ移されました。近くには海舟の没後に洗足軒の隣に建てられた「清明文庫」がありましたが、2019年に「勝海舟記念館」としてリニューアルオープンしています。

駅へ戻る手前には御松庵妙福寺があり、近くには日蓮が足を洗った際の「袈裟掛けの松」があります。歌川広重の「名所江戸百景　千束の池袈裟懸松」にも描かれた松で、現在は３代目になっています。

【取材】文：広報部会・菊池真一／イラスト：同・福島信一

江戸博クリップ

デジタルアーカイブ

事業企画課　資料係　大城杏奈（おおしろ あんな）

江戸博の学芸員になって早一年。筆者は駆け出しの日本美術史研究者でもあります。「研究はとにかく軽いフットワークが大切」「作品を自分の目で直接見ることが肝心」と言い聞かせてきた身にとって、ステイホームが叫ばれるコロナ禍では、まさに手足をもがれたような苦しさがありました。

そんな状況下で、研究に一層欠かせない存在となったのが、インターネット上のデジタルアーカイブです。博物館・美術館の所蔵資料や、図書館の蔵書を検索するだけでなく、高精細画像で貴重書の中身を１ページずつ読むこともできてしまう。研究者にとって、デジタルアーカイブは魔法の杖かもしれません。

近年、国内のデジタルアーカイブの充実度は急速に高まりつつあります。その反面、整備を阻む要因として予算や権利の問題などが浮上していますが、一番の要因にはデータ整備の大変さが挙げられるでしょう。魔法のように見えるデジタルアーカイブも、たくさんの人手と途方もない作業量によって手作りで生み出されることを、仕事をしつつ実感します。

さて、まもなくこの春、江戸博の新たなデジタルアーカイブが誕生します。これを作るにあたって、本当に使いやすい江戸博のデジタルアーカイブはどのようなものか、学芸員が徹底的に検討、追求してきました。今年はやむなく反映できなかった機能などもありますが、今後さらに進化を重ねていく予定です。公開されましたら是非ともよろしくお願いいたします。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸 名所図会を歩く…53

［東叡山寛永寺］（後）

根本中堂「瑠璃殿」勅額

前回は上野公園入り口から開山堂までででした。今回はその続きで、上野公園の名所図会探索の後半となります。JR鶯谷駅の南口から出て新坂を上ります。坂の右側一帯は寛永寺の霊園で、上りきって右折し霊園に沿って歩きます。

宗廟から勧学寮

この霊園は元は徳川将軍家の宗廟で、二つの廟に6人の将軍の墓がありました。第一、第二霊廟とも空襲で消失しましたが、勅額門、水盤舎、奥院の唐門と宝塔は残りました。普段は霊廟への立ち入りはできず、道沿いにある厳有院霊廟勅額門と、寛永寺第三霊園入り口を入って右奥にある常憲院霊廟の勅額門で往時の姿を偲ぶのみです。

常憲院霊廟勅額門を後にそのまま道なりに左に行くと、現寛永寺本堂の裏門になります。入るとすぐに白壁と板を組み合わせた塀が続き、その中にこぢんまりとした建物が見えます。徳川慶喜が謹慎していた葵の間のある書院で、本堂と渡り廊下でつながっています。現在の寛永寺の本堂は明治12年(1879)、子院の大慈院跡地に天海ゆかりの川越喜多院の本地堂を移築したもので、寛永寺本来の建物ではありません。正面に掲げられた根本中堂の唯一の遺物である「瑠璃殿」の勅額と、本堂前の左右にある竹の台から移植された竹の台といわれる囲みだけが本来の姿にゆかりのものです。

現寛永寺のある大慈院跡の西側エリアには勧学寮がありました。「俗に百軒長屋という。池之端錦袋圓の元祖了翁僧都天和二年に建立す」とある了翁僧都の坐像が、本堂に向かって右側の朱色の祠に祀られ、隣には人物経歴を紹介した道行碑記が立っています。了翁僧都は秘薬の製法を取得し、錦袋圓と名付けて上野池之端仲町で店を営み、その売上3000両を元に寛永寺に勧学寮を建て、広く社会福祉や教育文化事業に貢献しました。店のあった場所は前々回不忍池の項で紹介した「雪見橋碑」のある辺りです。図会では「萬病錦袋圓　勧学屋大助」の看板を掲げ、繁盛する店先の挿絵が2頁にわたって描かれています。

常念仏堂から大石燈籠

寛永寺を出て芸大に沿って歩いて行くと護国院です。寛永寺の最初の子院で、寛永元年(1624)、博物館東部に創建、同7年釈迦堂が落成して護国院が完成し、これを常念仏堂といって根本中堂ができるまでは度々法会に使用されました。家光や家綱、綱吉廟建立の度に移転を繰り返し、宝永6年(1709)現在地へ移転しました。明治後は釈迦堂のみ残り、現在は谷中七福神の一つ、大黒天のイメージが強くなっています。

▲長谷川雪旦　清水堂花見の図

護国院を左に出て、そのまま動物園との間の緩やかな道を下ってしばらくすると東照宮不忍口の鳥居が現れます。石段を登り、そのまま進むと正面に五重塔が見え、左手に進むと本殿参道です。社殿唐門は平成26年に修復が終わり、きらびやかな姿を取り戻しました。図会では「東照大権現宮　文殊楼の後左の方にあり」という記述のみで、もちろん挿絵はありません。続いて東照宮正鳥居を出て右に回ると「同所構の外にあり」とあるように、樹木に囲まれた一角の中に大きな石の燈籠が見えてきます。これは佐久間大膳亮勝之が南禅寺、熱田神宮とあわせて奉納した三大燈籠のうちの一つで、俗にお化け燈籠と呼ばれています。

鯨鐘から清水観音堂

精養軒の入り口左側の小高い丘の上に時の鐘があります。何度も来ている上野公園なのにいつも下を向いて歩いていたのでしょうか。この鐘には気が付きませんでした。図会にはこの鐘の他に「鐘楼」という項目もありますが、それは法華堂・常行堂の左方、現在の小松宮銅像の立つ場所にあった土井大炊候建立の公式の鐘でした。鯨鐘は時の鐘として寛文6年(1666)に建立されました。

鐘の向かい側には大仏山があります。寛永8年に創建された大仏は度重なる火災や地震でも復興されましたが、関東大震災で首が落ち、その後取り払われて大仏の首だけが壁面にはめ込まれました。今は、これ以上は落ちない大仏として合格祈願のお参りが増えているそうです。大仏山の南側の旧参道を降りていくと、右側に花園稲荷神社が見えてきます。鳥居のある坂の下り口に「稲荷坂」の標識があり、ここは「忍岡稲荷」とも「穴稲荷」とも呼ばれたことが書いてあります。図会では「忍岡稲荷祠」と表記し、「文殊楼の左にあり。石窟の上に祠ある故に世俗穴稲荷と号く」とありますが、その旧跡が残っています。

上野探索の最後は清水観音堂です。「京師清水寺に比して舞台造りなり。この辺ことに桜多し」とあり、元禄以降は一般に開放されて、庶民もこの桜を楽しんだことでしょう。観音堂は現存の旧寛永寺建造物では最古で、広重にあやかった月の松も復元されています。観音堂と庫裡の間に架かる渡り廊下の下の道は正式の参道で、ここを真っすぐに行くと天海僧正毛髪塔が見えてきます。この地は寛永寺発祥の本覚院があった場所で、本坊円頓院ができるまで、本覚院は寛永寺の本坊でした。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・中村貞子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

新型コロナウイルス感染防止にご協力を

新型コロナウイルス感染防止のため一時中止していた催事は、昨年８月のセミナーから再開してきました。しかし昨年末からの感染者急増、１月７日緊急事態宣言を受けて、申し訳ありませんが１、２月の催事は全て中止または延期とし、参加申込者にははがきなどでご連絡させていただきました。

今後の感染者状況によりますが３月の見学会を除き、３月以降の催事は開催する方向で準備を進めています。なお、引き続き新型コロナウイルス感染防止のために催事申込および参加時には下記のご協力をよろしくお願い致します。

1．申込みはがきに必ず会員番号、連絡先電話番号も記入、同伴者があるときは氏名、電話番号、住所をご記入ください。

2．①から④に該当する場合は、来場・参加はご遠慮ください。
①発熱があり検温の結果、37.5℃以上　②咳・咽頭痛などの症状がある　③新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がある　④過去２週間以内に入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国・地域への訪問履歴及び当該在住者との濃厚接触がある

3．来場時(見学会も同様)は、以下の①から⑥を守ってください。
①入館時に検温を受け、マスクを着用し、手指を消毒する、見学会参加時には自宅で体温チェックし、マスクを着用する　②受講票切り取り線下部のチェック表に記入提出する　③会場内及び見学時の会話は極力控える　④咳エチケットを守る　⑤入場前・トイレ待機・終了後退出などの際は社会的距離を保つ　⑥会場内や見学時に体調不良の場合、速やかにスタッフに伝える

◆新型コロナウイルスの感染による催事中止(延期)のお知らせをはじめとして、「えど友ホームページ」には、友の会の最新の情報が掲載されています。ぜひご覧いただいてお役立てください。

事業部会長　待場　浩

古文書講座

◆ 2020 年度第３期日程変更のお知らせ

古文書講座2020年度第3期は、1月、2月は中止。3月開講、4月を追加し2回で終了。なお、入門編の3月の日程は、緊急事態宣言延長を受けて再度変更になっています。ご迷惑をお掛けして申し訳ありません。ご注意ください。

◆入門編　3／24(水)、4／14(水)
◆初級編　3／17(水)、4／28(水)
◆中級編　3／27(土)、4／17(土)

- 時間：各講座とも　午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも　江戸東京博物館・１階会議室
- 参加費：各講座とも全２回1,500円(初回一括払い)

新年度の講座概要、第１期の日程、申込方法などについては３ページをご覧ください。

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会セミナー

第 201 回「江戸美人の女性美　髪型と化粧」

講師　村田孝子さん(ポーラ文化研究所シニア研究員)

◆江戸時代は、女性の髪型や化粧を見れば、その人がどのような身分、階級なのか、また未婚・既婚、職業、地域などもだいたいわかりました。今回はファッションリーダーといわれた遊女などを中心に、江戸中期以降、江戸の美人がどのような装いをしていたのか、浮世絵などから、探ってみたいと思います。

◆講師略歴：むらた・たかこ
ポーラ文化研究所化粧文化チーム、現在シニア研究員。ビューティサイエンス学会理事長。国立歴史民族博物館近世リニューアル委員。江戸東京博物館外部評価委員。著書は、『眉の文化史』『モダン化粧史』『日本の化粧』(ポーラ文化研究所共著)『結うこころ－日本髪の美しさとその型』(ポーラ文化研究所編著)『浮世絵にみる江戸美人のよそおい』(ポーラ文化研究所編著)『江戸三〇〇年の女性美―化粧と髪型』(青幻社)他多数。

- ３月26日(金)　14時～15時30分
- 申込締切：３月11日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】林　正信(事業部会)

第 202 回「家康以前の江戸城 ―知られざる太田道灌・小田原北条氏時代の縄張り―」

講師　谷口　榮さん
(葛飾区産業観光部観光課主査学芸員)

◆江戸城の歴史を語るときには、太田道灌と徳川家康を登場させて説明されてきました。しかし、その２人の間の小田原北条氏時代について触れられることがありません。
実は、家康の江戸入部以後の江戸城や城下の開発を考える上で、小田原北条氏は重要な役割を果たしていると谷口さんは考えています。テレビでは東京下町の史跡案内や解説をされることが多い谷口榮さんですが、今回ははるか昔にさかのぼって、家康以前の江戸城のお話をしていただきます。

◆講師略歴：たにぐち・さかえ
昭和36年(1961)東京都葛飾区に生まれ、現在も葛飾区在住。国士館大学文学部史学地理学科卒。博士(駒澤大学　歴史学)。職歴：立正大・明治大・国學院大・和洋女子大兼任講師、NHK 高校講座日本史講師歴任。現在、葛飾区産業観光部観光課主査学芸員。日本考古学協会理事。観光考古学会理事。日本歴史学協会会員。境界協会顧問など。著書『江戸東京の下町と考古学』、『東京下町の開発と景観』、編著『吾妻鏡辞典』など。

- 開催日時：４月10日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：３月25日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】日比雅明(事業部会)

第203回「江戸時代人の動物観ー「不思議な存在」狸は化ける　狐はどうする?」

講師　石田　戢さん(動物観研究所所長)

◆明治の文明開化以後、社会は大きな変化を遂げたが、動物観についても同様のことがいえる。江戸時代、動物は理論、学問の対象として考えられたことはほとんどないが、昔話の主人公となって道徳的素材として大いに用いられた。また妖怪的であったり、哀れみの対象であったり、動物食文化などで、現在とは様々な特徴的な違いがある。今回はその中から、狐と狸、昆虫、そして生類憐みの令を取り上げ、欧米や現在との比較を通じて、江戸時代の動物観の一端を考えてみる。

◆講師略歴：いしだ・おさむ
1946年東京生まれ。71年東京大学文学部卒、同年上野動物園勤務、井の頭自然文化園、葛西臨海水族園勤務などを経て多摩動物公園副園長、2007年帝京科学大学教授、2014年千葉市動物公園園長、2019年退職後、動物観研究所所長。その間、ヒトと動物関係学会会長、ボルネオ保全トラストジャパン理事長など。

- 開催日時：５月８日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：４月22日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

見学会

再訪・品川宿を巡るー徳川将軍家との縁ー

◆昨年３月にバスで品川宿から千住宿を巡る計画でしたが、新型コロナウイルス感染禍で今年３月に延期としました。しかしコロナ感染は収まらずバス旅行は取りやめ、分割して開催することとし、今回は品川宿を訪れます。品川宿は江戸日本橋から約２里、東海道第一の宿場でありますが、ここには徳川家康にはじまり、秀忠、家光や歴代将軍との縁のある寺院や神社も多いことも特徴です。また江戸庶民にとっては遊興地でもありました。まず江戸の街道と宿場を確認して、青物横丁駅を起点に旧街道の面影を残す海雲寺、品川寺から荏原神社まで南品川を歩き、沢庵和尚の東海寺、品川神社を巡って旧街道に戻り、本陣跡をはじめ土蔵相模跡まで北品川の主要な所を散策し、北品川駅で解散です。多くの方のご参加をお待ちしています。

- ４月18日(日)　小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時15分　受付終了：12時45分(時間厳守)
- 集合場所：京浜急行「青物横丁」駅改札出口階段下
- 申込締切：４月５日(月)必着
- 定員：80人　同伴者可(保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い釣銭なし)

【企画担当責任者】待場　浩・川上由美子(事業部会)

会員優待のお知らせ

●特別展「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵 古代エジプト展　天地創造の神話」

会　期：11月21日(土)～４月４日(日)
会　員：一般900円、65歳以上720円、大・専門生720円、高・中・小学生450円
同伴者：一般1,440円、65歳以上1,150円、大・専門生1,150円、高・中・小学生720円
●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●特別展「冨嶽三十六景への挑戦　北斎と広重」

会　期：４月24日(土)～６月20日(日)

企画展のご案内

●「市民からのおくりもの2020 ―令和元年度新収蔵品を中心に―」

会　期：３月９日(火)～５月９日(日)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

３月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

４月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

催事のお申込方法

◆**普通はがき(63円)**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
④電話番号(同伴者)、住所(見学会同伴者)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録、切り取り線下部のチェック表を提出してください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(11時～12時、13時～16時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第119号
令和３年３月１日発行(奇数月１日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：林　正信(会長)　編集長：中村貞子
岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、横島利明、福田 徹、元沢 宏、秋元康良
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910